慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	人工授精にかんする若干の調査
Sub Title	Some examinations on artificial insemination
Author	田中, 実(Tanaka, Minoru)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1962
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.35, No.8 (1962. 8) ,p.80- 85
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19620815-0080

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

資料

人工授精にかんする若干の調査

田中　実

はしがき

一　人工授精にかんする法学的研究を始めてから既に十年近くなり、その成果は、『人工授精の諸問題――その実態と法的側面』（慶応義塾大学法学研究会刊）に一応まとめておいたが、ここ数年来、さらに実態調査の方法によつて、人工授精の実施状況についても明らかにしたい、と考えていた。もつとも、前掲書の附録には、とくに医学部・中島教室の御好意で若干の調査資料を収録させていただくことができたけれども、やはり自分自身の手で直接に調査を試みたい希望を捨てかねていた。

たまたま昭和三十四年から三十六年にかけて私のセミナーに所属していた学生・中尾光佑君が、人工授精の諸問題に興味を寄せ、卒業論文を書くことを私に相談してきたことから、同君と協議の上、この調査にとりくんでみることになつた。幸いにも、同じセミナーに所属していた学生・松沢勝君等の助力が得られ、また塾当局から昭和三十五年度（後期）学事振興資金による研究補助がみとめられ、まことに有難いことであつた。

二　調査を実施すべき対象としては、実際上の便宜から、慶応病院・産婦人科（家族計画相談所）と、京都府立医大病院・産婦人科との二病院を選び、診療ないし相談にみえる患者およびその配偶者に、所定の質問表に記入してもらうという方法を用いた。

まず、慶応病院における従前の調査（前掲書附録参照）を参考として一応の質問カードをつくり、約三ヵ月間の予備調査を行ない、その結果を整理して質問カードに多少の修正を加え、あらためて本調査にとりかかつた。

ところが、残念なことに、この調査の途中で、中尾君等が卒業し

てしまつたばかりか、私自身も海外留学に出発しなければならなくなり、ついに予期どおりの調査を完了することができなくなつた。準備した質問カードはまだ残つているので、他日、機会をみて調査を続行するつもりであるが、とりあえず、ここには、右の予備調査および本調査の結果を整理しておきたい。カードの総数は、わずかに一五九枚で、当初の私の計画からすれば甚だ物足りないものではあるが、その主要点は、つぎのとおりである。

調査の結果

三　この調査が、前期のように二病院の産婦人科において行われ、診療ないし相談にみえた人々のみを対象とした結果、カードにあらわれたものは、九〇%ちかくまでが、婦人であつた。

男	女	無記入
一六	一三三	一〇

四　年齢は、二六歳ないし三五歳のものがきわめて多く、その結婚年数は、三年ないし五年のものが多い。どく当り前のことだが、二十歳代の前半で結婚し、数年しても子供に恵まれないので病院の診療を受けるというのが、一般的な場合なのであろう。もちろん、男と女とでは違うはずだが、女が圧倒的多数なので、しいて区別する必要をみとめなかつた。

年齢	人数
二〇歳以下	〇
二一歳—二五歳	一四
二六歳—三〇歳	六八
三一歳—三五歳	六〇
三六歳—四〇歳	一一
四一歳以上	六

なお、夫婦間の年齢差についてみると、三年ないし六年というところが、もつとも多いようであつた。

結婚年数	人数	結婚年数	人数
〇年	一	一三年	三
一年	一	一四年	〇
二年	一四	一五年	一
三年	二六	一六年	一
四年	二二	一七年	二
五年	三〇	一八年	〇
六年	九	一九年	二
七年	八	二〇年	四
八年	九	二四年	二
九年	六	二六年	一
一〇年	七	二七年	一
一一年	一	三〇年	二
一二年	四	無記入	一

五　学歴では、旧制の高女・新制の高校が最も多く、旧制の専門学校・新制の短大が、これに次いでいる。一般的に、中等ないし高等程度の教育

年齢差	人数
〇年	一三
一年	一七
二年	一二
三年	二六
四年	二〇
五年	一九
六年	一七
七年	七
八年	五
九年	三
一〇年	六
一一年	三
一二年	二
一三年	二
一四年	一
一五年	一
一六年	〇
一七年	一
無記入	三

を受けた中流階層ということができようか。旧制の小学や、新制の小学・中学が皆無であつたことは、注目に価しよう。しばしば人工授精は無学・非常識の人々によつてのみ行われるかのようにいわれているが、事実はけつしてそうではないようである。

旧制	
大学	〇
専門学校	二七
高*校	三五
中学・高女	三八
高小	一五
小学	〇

新制	
大学	四
短大	一三
高校	二二
中学	〇
小学	〇

無記入	
	一

*旧制高校の数が意外に多いのは、旧制高女を誤つて記入したためであろうと推測される。

六 信仰する宗教についてみると、信仰なしというのが過半を占めている。無記入がかなり多いが、これも実質は信仰なしに近いものであろう。信仰あるものの方では、仏教が多いが、人工授精は自然の理ないし神の法に反するとしてつよく反対するはずのカトリックが若干あることは、注目すべきである。

信仰する宗教	人数
仏教	四八
神道	六
プロテスタント	四
カトリック	三
その他	二
信仰なし	八七
無記入	一四

七 職業では、当然のことながら、主婦というのが過半であり、かなり差をおいて、自家営業・公務員などがつづいている。念のため、予備調査の質問カードにはなかつた「あなたの配偶者の職業」という項目を本調査のさいに加えてみたところ、下段のような結果になつた。

職業	
主婦	九一
自家営業	二三
公務員	一九
会社員	一二
農業	五
自由業	一
その他	五
無職	一五
無記入	二

配偶者の職業	
会社員	三一
公務員	二一
自家営業	一五
主婦	五
農業	四
自由業	二
その他	三
無職	二
無記入	一

八 月平均収入としては、二万円ないし五万円程度が大部分を占め、従前の慶応病院調査と同じ結果がみられたが、要するに、中産階級ということであろうか。二万円未満のものよりは、五万円をこえるものの方が、だいぶ多い。調査対象となつた各病院の利用者ないし患者層とやはり一致するのかもしれない。

月平均収入	
一万円未満	一
一万—二万円未満	九
二万—三万円未満	六五
三万—五万円未満	五七
五万—八万円未満	一四
八万円以上	九
無記入	三

子供がほしい理由	
養子より自分の子供がほしい	九七
子供が好き	六〇
老後が心配または淋しいから	二一
相続人がほしい	二一
淋しいから	一七
他人の子供がうらやましい	一一
世間てい	四
優生学(遺伝の関係)上	二
何となく	二
血液型(Rh因子の関係)上	一
その他	三

九 子供がほしい理由としては、従前の慶応病院調査と同じく、血を分けた自分の子供がほしく養子ではいやだというものが圧倒的に多く、子供が好きだからというものが、これについで多い。相続人がほしいとか、老後をみてもらいたいとかいうような理由がずつと少ないことは、十分注意されてよいであろう。なお、働き手となる者がほしいという項目を設けておいたが、ゼロであつた。

一〇 人工授精による子供と養子との、いずれを好むかという一般的な質問に対する回答は、つぎのとおりであつた。

人工授精子	一三九
養子	七
どちらでもよい	六
無記入	六

道徳的	三六
非道徳的	一
関係ない	八七
無記入	三四

人工授精子を希望するものが圧倒的に多いことは、調査の対象の多くが人工授精の相談のために病院に現われた人たちであつたという事実からすれば、むしろ当然のことであつて、大して意味のないことであつたが、さらに、人工授精を道徳的にどう思うかという、いわば人工授精に対する道徳観を問題にした質問については、つぎのような結果であつた。

関係ないとするものが過半を占め、積極的に道徳的とするものが余り多くないことは、人工授精の道徳的側面に対する消極的・無関心の態度の現われであり、また無記入のものがかなりの数に達していることは、懐疑的な人が少なくないことを示している、といえよう。

一一 予備調査で単純に人工授精に対して賛成か反対かの質問を出したところ、上段の表のような結果となり、つぎに、本調査でこれを改め、AIDとAIHとを対照させて質問を出したところ、下段の表のような結果となつた。前者について、反対・わからない・無記入などの消極的態度をとるものが相当数あり、また後者について、消極的態度のものが減少するとともに、AIHだけの賛成者が三〇%ちかくみられることは注意すべきであろう。

賛成	五四
反対	二
わからない	一一
無記入	七

両方とも賛成	五三
AIHだけ賛成	二五
反対	〇
わからない	三
無記入	三

養子をむかえる考えはある	一七
養子をむかえる考えはない	六三
わからない	二八
無記入	四九

なお、人工授精をしても成功しなかったときに、養子をむかえる意思があるかどうかとの質問については、上のような結果であり、わからない・無記入などのような態度保留者が相当に多いことは、人工授精に対し懐疑的な人が少なくないにしても、やはり養子が好まれていないことを示すものであろう。この点も、従前の慶応病院調査とほぼ同じである。

一二　誰の精液を望むかという質問について、予備調査の結果は、上段のとおりである。全く知らない人のものを望むものが圧倒的に多く、夫の近親者のものというのが少数ある。試みに、本調査で、夫という項目を入れてみたところ、下段のような結果となつた。

全く知らない人	五八
夫の近親者	六
知人	○
その他	三
無記入	七

夫		五七*
全く知らない人	三〇*	
夫の近親者	○	
知人	○	
その他	○	
無記入		四

* 両者ともに回答したものが八ある。

夫のものを希望するものが多数を占め、全く知らない人というのが、これにつぎ、夫の近親者およびその他というものが皆無となつた。依頼者の偽りない気持がよくあらわれているが、いずれにせよ、家族制度的意識がむしろ薄弱であることは、注目に価しよう。

一三　夫婦のうち、どちらが先に人工授精を希望したかという質問では、夫妻それぞれ約同数で、わずかに夫の方が多く、また、両親の賛否については、大多数が秘密を保つており、相談したものとしては、大部分が賛成になつている。いずれも、慶応病院調査と大差ないが、無記入がかなりの数に達していることは、何となくアイマイで、気になるところである。

希望の先後	
夫が先	六七
妻が先	六五
同時	四
無記入	二五

両親の賛否	
賛成	三四
反対	二
知らせてない	一〇一
無記入	二一

一四　いくぶん意地の悪いことだつたが、もし人工授精子が生まれたあとで夫婦間に実子ができた場合どうするか、という質問を設けてみたところ、大多数が生むと回答し、ごく少数が中絶すると回答した。かなりの数の無記入があることは、当事者の迷いを示すものであろう。

生む	一一八
中絶する	六
無記入	三四

一五　もし人工授精子が生まれたならば実子と同じ愛情をもつて

育てる確信があるか、との質問に対しては、大多数が確信があると答え、ないと答えたものが皆無であつたのは当然としても、不明と無記入が若干あることは、当事者の気持の割りきれなさを示すもので、大きな問題をふくむのではないかと思われる。

確信がある	一三四
確信がない	○
わからない	八
無記入	一六

あとがき

一六　今回の調査の主要点は、およそ以上に摘記したとおりである。もちろん、これらのほかにも、回答を求めた問題点は、いくつもあるが、あまり重要でもないようなので、ここには割愛する。

この調査の不徹底・不十分であることは、自認せざるをえないが、それでも、人工授精の希望者が現在かなりの多数に上り、辛棒づよい熱意を示していること、一般に中等ないし高等程度の教育を受けた中産階級が多いこと、家族主義的観念よりは、むしろ自分の子がほしいという自然的・本能的な家族感情――あるいは、いわゆる家族への逃避欲求――につよく動かされていること、宗教的ないし道徳的側面からの関心の低いこと、人工授精子に対する気持が割りきれているようで、やはり意識の底には割りきれないものが沈んでいるらしいこと、等々の諸点が多少とも明らかになつたことと思う。

最近、未婚の婦人が人工授精子をもつたという手記が公表されたり（婦人公論・昭和三七年四月号）、人工授精をした妻と夫との心理的葛藤をテーマとしたテレビ・ドラマが放送される（TBSテレビ・昭和三七年四月二六日夜）など、人工授精がいつそう世間の人々の注目を集めるにいたつている折から、私は今後もなお機会をみて徹底的な調査を続け、現在および将来にわたる人工授精の諸問題にアプローチしてゆきたい、と考えている。（一九六二・五・三）